

テーマ： こどもと環境 巻頭言

自然に根差した生活文化が育む智慧

弘本由香里（大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所客員研究員）

「カマやナタで物を切ったり割ったりしたことがない」59.8%、「木の実や野草などをとって食べたことがない」57.4%、「わき水を飲んだことがない」53.4%、「日の出や日の入りを見たことがない」50.7%、「生まれたばかりの赤ちゃんを見たことがない」49.8%、「赤ちゃんを抱っこしたことがない」34.5%。

これは、こどもたちの自然体験・生活体験の研究や実践、政策づくりなどに関わっている人たちの間ではよく紹介されるデータなのですが、川村学園女子大学子ども調査研究チームが、2004年に実施した「子どもたちの体験活動等に関する調査」結果の一部です。アンケート調査の対象となったのは、東北地方、関東地方の1都9県から選んだ、小学校21校（1,768名）、中学校11校（1,520名）で、小学4年生から中学3年生（回収率は63.9%）です。地域や学年のバランスを考えて選ばれていますので、都市部のこどもだけではありませんし、偏った年齢層のこどもが対象になっているわけでもありません。

同様の調査が、過去にもたびたび行われてきているのですが、こどもたちの自然体験・生活体験の希薄化は、この20年ほどの間に驚くほどの激しさで進行してきています。たとえば、1984年に文部省青少年教育活動研究会が実施した調査（小学4年生から中学2年生、約2,000人対象）では、「日の出や日の入りを見たことがない」は19.7%ですが、1995年になると2倍以上の40数%に達しています。冒頭で紹介した調査とは、対象に多少違いがあるとはいえ、2004年時点の類似調査で「日の出や日の入りを見たことがない」は50%を超えているという結果があるわけです。一つのデータが物語る背景と予想される未来について、私たちは真剣に向き合うべき時にあるのではないかと思えてなりません。それは、学校や家庭内の問題という枠を超えて、人間と社会の持続可能性に関わる根源的な問題を象徴しているのではないのでしょうか。

高度経済成長期にこども時代を過ごした私は、大量生産・大量消費時代の幕開けとともに、第二次産業が急成長し地域の山や畑がどんどん失われていく様子を目の当たりに育ちました。けれども当時は、生活の基盤に、農業・林業や漁業などの営みとともに築かれてきた、生活文化の名残がまだまだ色濃く残っていたものです。農家はなくなっても、春先になれば、秋の収穫を祈念する予祝とともに農繁期前の楽しみでもある、山遊び・野遊びの風習がありました。ちょうど桜が満開の頃の4月3日をお節句と呼び、山に出かけてお弁当を広げ食事を楽しんだものです。ついでに山菜も採って帰ります。海辺では潮干狩りがあります。遊びを通して、地形や自然の特性も体で覚えていきます。

農業が盛んな地域では、夏には虫送りや雨乞いの行事が、秋には収穫を祝う祭りが、冬

から春にかけては新たな年の恵みを祈り、精気を養う祭りが繰り広げられます。一年の生活文化のサイクルは、地域の自然環境に根差した生産の営みと一体のものとして成立していました。その生活文化のサイクルの中で、こどもたちも地域の自然環境に関わり、生活技術はもちろんのこと生命の連続性への気づきをはじめ、生きる智恵を育んでいました。

今、私たちの生活の単位や中味に目を向けますと、個人化がどんどん進行し、刹那的な思考にも陥りがちです。共有する地域の生活文化の多くも失われています。けれど、社会の変化のスピードがめまぐるしく、家族の小規模や個人化、多文化化が進めば進むほど、実は、変わらないものの存在やゆっくりとした時間がいっそう大切になってきます。繰り返す自然の循環の確かさや、人間の寿命をはるかに超えて存在する木々、山や海の存在など、命のつながりに思いを馳せることのできる、大きな心の拠り所になるはずで

す。こどもと環境の豊かな関係を考え築いていくことは、社会の持続可能性に向き合うことにほかなりません。地域の自然に根差して命を支える第一次産業のあり方や、自然の循環に寄り添う生活文化の再構築など、社会全体の課題であることに気づかされるのです。